

## 樟徳館意匠のデータベース化

—— 建具、欄間、照明器具 ——

辻 壽 一  
山 田 信 博

### 要旨

樟徳館は、記念館とともに樟蔭学園の歴史的遺産ともいえる登録有形文化財に指定されている建築物である。この貴重な文化遺産を未来に引き継いでいくために、その維持・保全にかかわる研究が今後必要であると考え。本研究は、まず今後の樟徳館調査のための基本となる建物平面図、展開図などのデータベースを作成する。さらに、樟徳館の床・壁・天井の意匠とその材料、また建具・欄間の意匠とその材質、照明器具の意匠、材質など、それぞれのデータベースを作成するものである。データベースは、各項目につきそれぞれの設置場所、意匠寸法、材質、数量などをまとめている。

### 1. 研究の目的

樟徳館は 1939 年（昭和 14 年）、樟蔭学園創立者である森平蔵氏の私邸として建設され、約 21 年間使用された。その後、学校法人樟蔭学園に寄贈されたもので、2000 年 10 月には国の登録有形文化財に指定されている。

樟徳館の敷地は、大阪電気鉄道（現在の近畿日本鉄道）が、1915 年（大正 4 年）に住宅地として開発を始めた布施巽台住宅地の北側部分にあたる。1928 年（昭和 3 年）、帝国キネマ演芸株式会社によって長瀬川沿いの広大な敷地に長瀬撮影所が作られたが、1930 年（昭和 5 年）に焼失した。その後、森平蔵氏が当該敷地の一部を取得し、私邸建設に着手した。森平蔵氏は実業家として材木商を営んでいたこともあり、樟徳館の建物には日本各地の銘木が使用されている。1932 年（昭和 7 年）から全国の銘木が収集され、敷地隣地には原木を加工するための製材所も設置された。建設工事は、1936 年（昭和 11 年）2 月から始まり、完成は 1939 年（昭和 14 年）頃と言われている。2000 年（平成 12 年）10 月には国の有形登録文化財に指定され、樟蔭学園が有する貴重な文化遺産といえる。

本研究の目的は、樟徳館の建物平面図、諸室展開図などを作成・データベース化し、さらに、樟徳館で使用されている主要部材や建具、欄間、照明器具などの意匠を分類・整理することで、樟徳館の保存および広報にも資する資料を作成することである。



展開図の作成も平面図と同様に実測調査をもとにして、データベース（CAD 図面作成）を作成した（写真-2、図-3、図-4 図-5、図-6）。



写真-2 各室展開実測

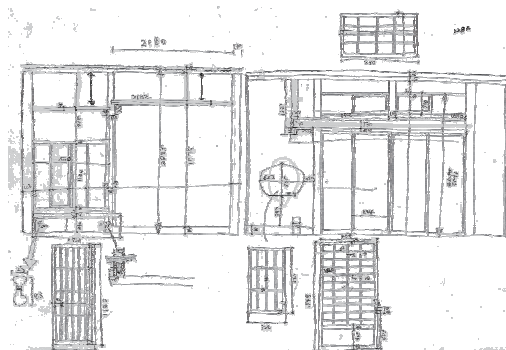


図-3 婦人室スケッチ

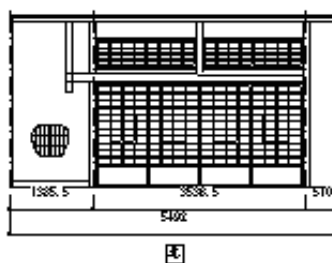
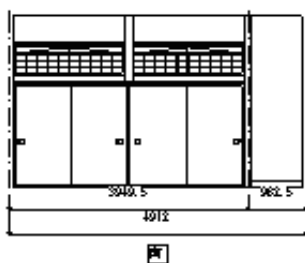
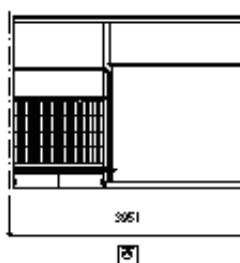
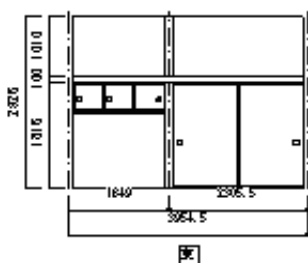
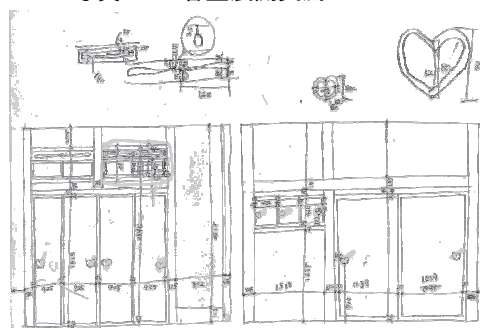


図-4 婦人室展開図

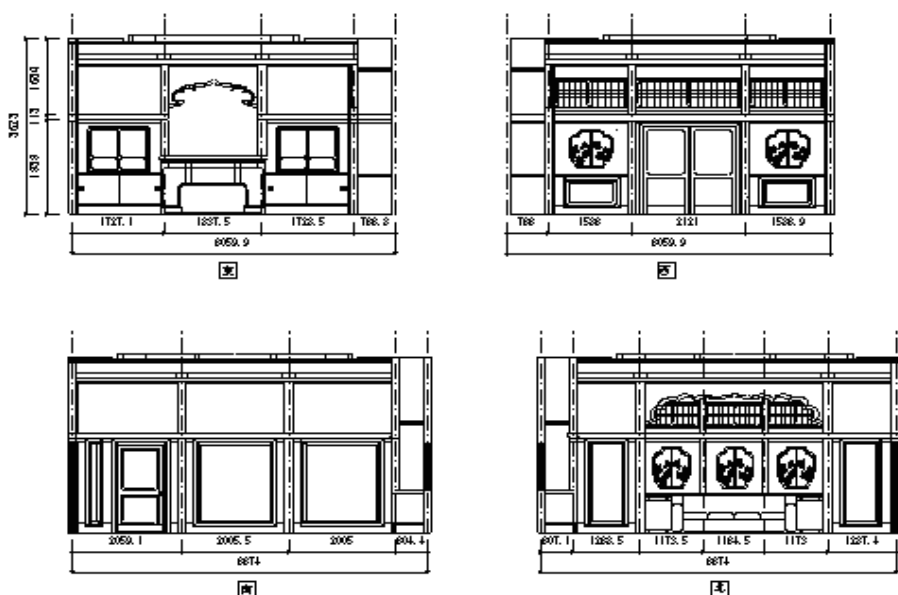


图-5 洋間展開図

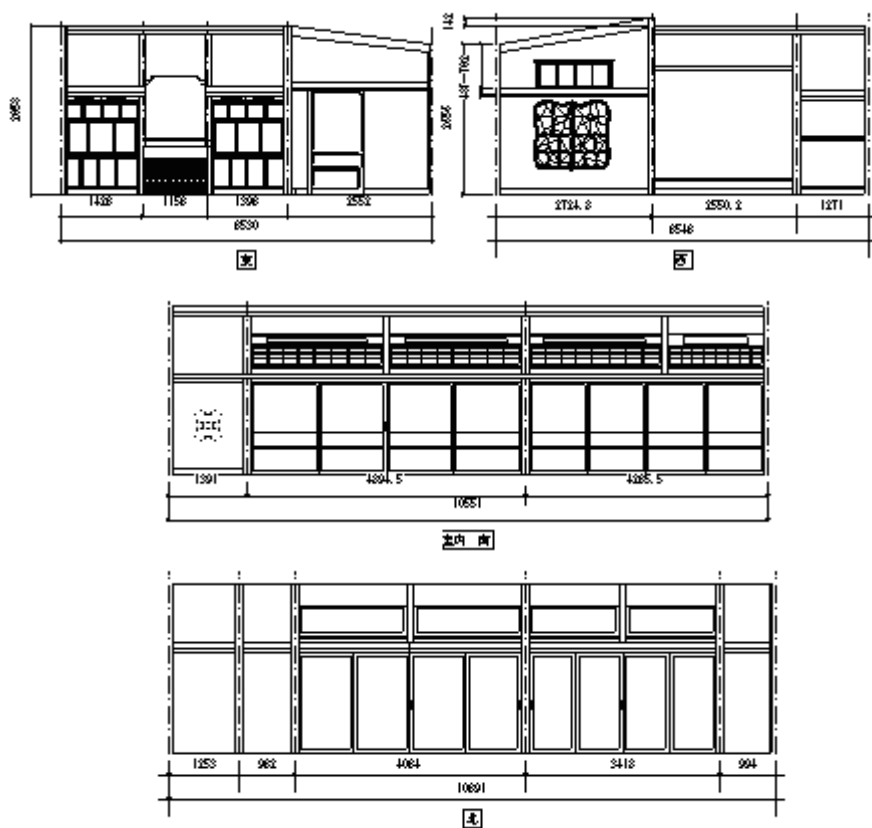


图-6 主人居間・書斎展開図



### 3. 樟徳館の床・壁・天井

樟徳館の建築材料は、森平蔵が材木商であったことから様々な種類、また貴重な銘木などが豊富に使用されている。ここでは、樟徳館の床・壁・天井で使用されている木材とその意匠をまとめた。

まず、樟徳館の各室床で使用されている主な種類としては、廊下を中心とした縁甲板張り仕上げ、主人居間・書斎、食堂で見られる寄木板張がある。和室の床は基本的に畳敷きとなっている。

廊下の縁甲板張りは、長いもので10mを超えるマツの長尺材が使用されている。また、地板や床の間で使われている板材は、ケヤキなどの一枚板が使われており（写真-3）、森氏の樟徳館建設への意気込みがうかがわれる。さらに寄木板張においては、主人居間・書斎の寄木張り仕上げは、ボーダー部に象嵌を組み合わせるなど意匠に凝っている（写真-4）。



写真-3 応接間地板



写真-4 主人居間・書斎 寄木張り仕上げ

壁の種類についてはそれほど特徴的な仕上げはないものの、洋間における鏡板と布クロス張りの併用など意匠を凝らした部屋も設けられている。

天井の形状で最も多いのは平天井で、洗面所などでは船底天井が採用されている。また、天井の仕上げ材には、特に洋間におけるクスノキの鏡板張り（写真-5）、主人居間・書斎のマツの大和張りが特徴的である（写真-6）。さらに、仏間天井材には貴重なスギの中枓材が使われている。

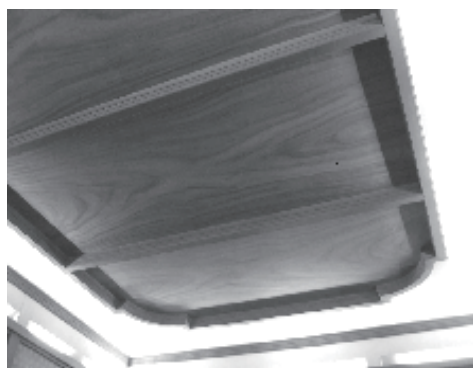


写真-5 洋間天井



写真-6 主人居間・書斎

#### 4. 樟徳館床・壁・天井のデータベース作成

データベースの作成は、主要諸室を、床、壁、天井別に室名、位置、仕様、材質、備考の各項目でまとめた。以下は、床・壁・天井仕上表の一部である（図-7）。

室名	主人居間・書斎	位置	床模様・拡大
			<p>ホーダーコーナー部 象嵌模様</p> <p>ホーダーコーナー部 象嵌模様 詳細</p>
			<p>ホーダーコーナー部 象嵌模様</p> <p>ホーダーコーナー部 象嵌模様 詳細</p>

室名	主人居間・書斎	位置	床・拡大
			<p>S=1/50</p>
			<p>拡大図 S=1/10</p>

室名	化粧室	位置	天井
			<p>S=1/50</p>
			<p>①</p> <p>②</p> <p>③</p>
仕様	調代天井	材質	竹（竿巻：10束）、杉（竿巻：12束）
構造	天井の一部が脱落しており、その上が矢羽織の調代天井になっている。板張りの割れた部分から調代天井が見えるような構造になっている。それを囲むように半線天井が片流れに張られている。洗面台上の天井は亀甲編の調代天井になっている。		

室名	化粧室	位置	天井・拡大図
			<p>S=1/50</p>
			<p>①部分拡大図 S=1/5</p> <p>②部分拡大図 S=1/5</p> <p>杉</p> <p>杉</p> <p>矢羽織（調代）</p> <p>亀甲編（調代）</p>

図-7 床・壁・天井仕上げ表

## 5. 樟徳館の建具

樟徳館における建具の種類は、和洋折衷した住宅建築でもあることから、多岐にわたっている。基本的に開き戸は銘木一枚板を使用した框戸が中心である。また引戸などの種類として、板戸、襖、紙障子、ガラス障子が使われている。

窓には、ガラス障子が多く使われており、ガラスの種類、その意匠にも多くの種類がある。洋間の窓・欄間ガラスには、ステンドグラスが用いられている。欄間は南側に3つ、西側にも3つあり、すべてに同じ牡丹と思われる花の絵が描かれている（写真-7、8）。



写真-7 洋間



写真-8 洋間欄間窓意匠

また、洋間南側に面した窓は、木瓜(もっこう)型のエッチングガラス窓となっている(写真-9)。南側に3つ、西側に2つあり、ステンドグラスと同様に牡丹と思われる図柄が採用されている。



写真-9 木瓜型のエッチング



写真-10 氷割れ紋様窓

また、主人居間にみられる木枠花頭(火灯)窓風氷割れ模様のガラス窓は極めて特徴的である。氷割れ文様は江戸時代に考案されたもので、冬の道で凍結した水溜りの姿をモチーフだといわれている。木枠には桑の木が使われており、氷割れ模様をしたエッチングガラスの引違い窓になっている。日本の伝統的な枠の形式と氷割れ模様の組み合わせであるが、大正・昭和モダンの香りを醸し出している（写真-10）。

## 6. 樟徳館の欄間

主人居間、書斎にある透し彫り欄間は特徴的である（写真-11）。

主人用居間と広間の境にみられる透し彫り欄間は、京都の醍醐寺三宝院寢殿における違い棚の海老束と似通っている。三宝院寢殿にみられる飾り棚の透し彫り（写真-12、写真13）は、花卉上部の梅に支えがみられるのに対し、樟徳館のそれは左右のみで上下には支えがみられない。



写真-11 主人用居間透し彫り欄

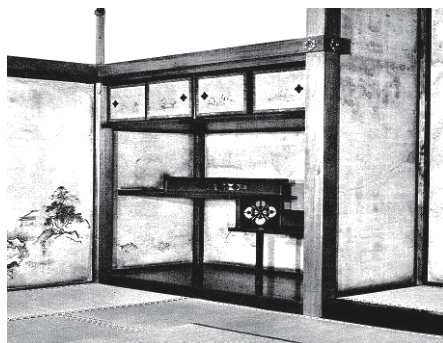


写真-12 醍醐寺三宝院寢殿

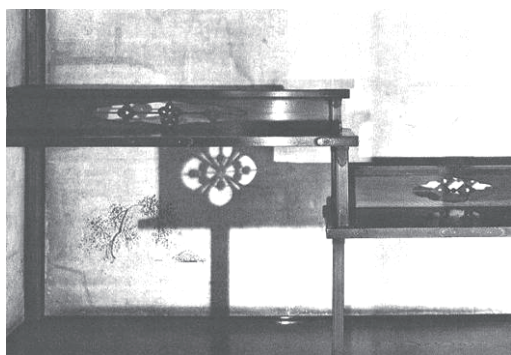


写真-13 醍醐寺三宝院寢殿違い棚詳細



写真-14 食堂

食堂北・南側欄間にはエッチングガラスがはめ込まれており、南側欄間は「梅」をテーマとしている（写真-14）。また北側の欄間は柱間に3つの欄間がはめ込まれており、中央に「梅」（写真-15、図-8）、両端には「ツバメと雲」（写真-16、図-9）が描かれている。

梅は「百花のさきがけ」といわれ、早春の花として親しまれている。古くから松・竹とともに「厳寒三友」の一つとして、厳寒の中で咲く梅の花の香りは尊ばれてきた。また、西側欄間にはツバメが描かれている。ツバメは冬が終わり、訪れる春のきざしだといえる。食堂欄間に描かれた意匠は、まさに春の訪れを表しているといえる。

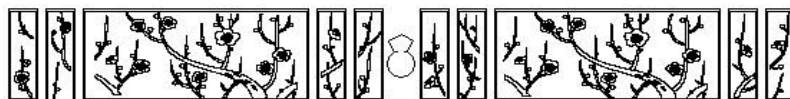


写真-15、図-8 食堂欄間意匠（北側中央部・南側）



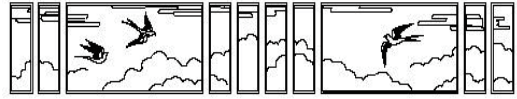
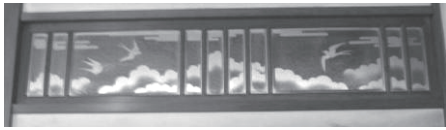


写真-16、図-9 食堂北側東部分欄間意匠

## 7. 樟徳間の照明器具

樟徳館で使用されている照明器具は多岐に渡る。器具の種類としてはペンダントライトが最も多いが、ブラケットやシャンデリア、また埋込照明なども見られる。特筆すべきは、洋間の照明に間接照明が使われていることである。その光源として蛍光灯が使われていた。

蛍光灯は、1856年にドイツの物理学者ハインリヒ・ガイサーによるガイサー管がその起源とされ、1926年にドイツ人エトムント・ゲルマーなどが現在の蛍光灯の原理を確立し、一般にはゲルマーが蛍光灯の発明者とされている。蛍光灯が商品化されたのは1937年のことで、アメリカの電機メーカーであるゼネラル・エレクトロニクス社がゲルマーの特許を取得し、生産・販売を開始した。日本にあっては、1941年にマツダ蛍光ランプとして一般に発売されている。

樟徳館の完成は1939年と言われているが、その場合、ゼネラル・エレクトロニクス社から蛍光灯が発売された翌々年にすでに洋間の照明器具として採用されたことになる。事実、樟徳館において建設当初からセントラル給湯設備が設置されるなど、当時の最新技術が取り入れられた。また、食堂配膳室にはエレクトロラックス社(スウェーデン)製のガス冷蔵庫が設置されていた。したがって、樟徳館の蛍光灯も他の設備と同様に米国から輸入された可能性も高い。

また、樟徳館洋間(写真-17)で使用されていたと思われる蛍光管が現存しているが、これは現在の東芝の前身である「マツダ」の商標で作られた製品である(写真-18)。しかし、蛍光灯が日本で初めて実用化されたのは、1940年に法隆寺金堂の壁画模写照明として使用されたものが最初とされ、また、前述のように日本における蛍光管の発売は1941年のことである。したがって、樟徳館が完成した年度以降のことになる。以上から、2つの可能性が考えられる。まず、当初洋間の蛍光灯はゼネラル・エレクトロニクス社製で、マツダの蛍光管は取換品として使われた可能性があるということ。しかし、建設当初からマツダの蛍光管が使用されていたとすると、樟徳館全体の完成年度は1939年ではなく、少なくとも洋間の完成は1941年以降である可能性も残る。



写真-17 洋間の間接照明

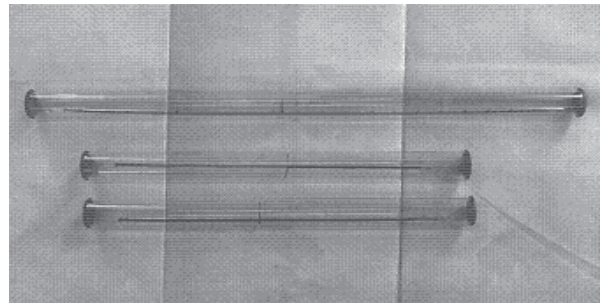


写真-18 洋間で使用された「マツダ」製の蛍光管

いずれにしても、樟徳館の照明器具においては当時の最新のものも使用されていた。

また、照明器具意匠については建設時における照明器具製作のデザイン画が発見された(図-10)。そのデザイン画に描かれた形状がすべて実際の照明器具として作られたかどうかは定かではないが、主要諸室の照明器具はオリジナルなデザインで作られたことは推測できる。事実、食堂のアールドコ調シャンデリア(写真-19)については、実際の照明器具とデザイン画が同一であることを勘案すると、これらのデザイン画で描かれた照明器具は、ほぼ建設当初の照明器具として設置された可能性が高いといえることができる。

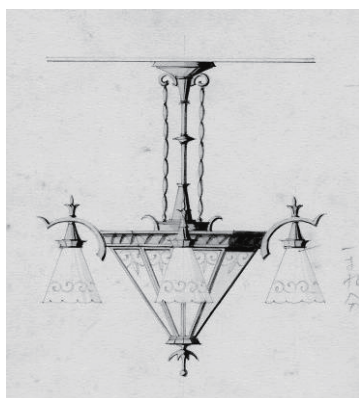


図-10 食堂照明器具デザイン画



写真-19 食堂照明器具

## 8. 照明器具のデータベース作成

樟徳館に使われている照明器具のデータベースを作成する。データベースには器具の名称、種別、寸法、材質、設置場所、数量、写真等を掲載する。

作成の方法は、まず対象となる照明器具を選定し、その実測寸法をもとにCAD (Vector Works) で図面化した(写真-20、図-11、図-12)。

調査対象となる照明器具の設置場所は1・2階主要諸室、廊下、建物外壁部などである。また、照明器具の種類は、主にペンダント、ブラケット、埋め込み器具である。



写真-20 廊下照明器具

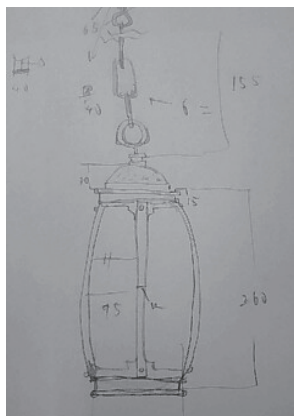


図-11 照明器具実測

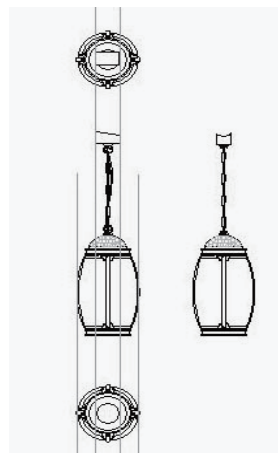


図-12 CAD作成

データベース化は、照明器具の配置キープラン図作成及び照明器具表の作成で行った。  
 照明器具リストの内容は、①配置番号、②種類、③器具寸法図、④器具写真、⑤取付け場所、⑥  
 設置箇所数、⑦外形寸法、⑧材質、⑨特記事項の各項目に分けている（図-13）。

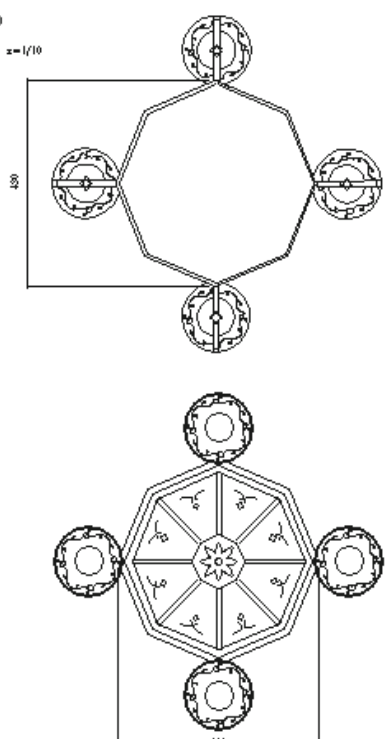
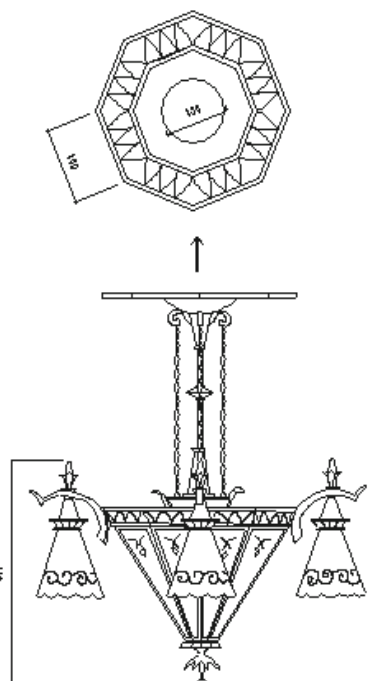
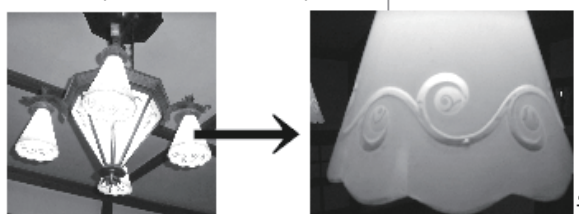
①配置番号	S 1	②種類	シャンデリア			
③ 						
④ 						
⑤取付場所	一階 食堂		⑥合計箇所数	1箇所	⑦合計数	1個
⑧外形寸法	横mm × 横mm × 高さmm		⑧材質	ガラス 真鍮		
	430mm × 430mm × 477mm					
⑨特記	写真a → 切子加工・サンドブラスト加工					

図-13 照明器具表

